

## 「憎らしい母なら、死んでも悲しまないでしょう？」

参考著書「人生の目的に気づく24の物語」中山和義著より

作家、西村滋さんの話です。

幼い時、彼のお母さんは結核になってしまい、粗末な離れの部屋に隔離されてしまいました。お母さんのことが大好きだった彼は周りの人に「近づくな」と注意されても、お母さんに会いに、そっと、離れに通いました。

しかし、一方で、誰よりも優しくかったお母さんの態度は豹変してしまいます。

寂しくなり会いに来た彼を見つけると、鬼のような顔をして、ありったけの罵声を浴びせ、コップやお盆など手当たり次第に投げつけました。

最初はそれでも、お母さんに会いたくて仕方がなかった彼でしたが、いつも醜い仕打ちを受けるうちにお母さんを徐々に憎むようになります。

そして、彼が6歳のとき、お母さんは病気のために、とうとう亡くなってしまいました。

葬儀の時、面倒を見てもらっていた家政婦のおばさんから、

### 「最後のお別れに、お花をあげたら…」

と勧められても、お母さんをすっかり憎んでいた彼は、棺の中を見ようともしませんでした。

その後、彼は9歳のときにお父さんも亡くし、施設を転々としました。

生活が荒れて、悪い仲間と付き合うようになり、果ては刑事事件を起こして少年院に入れられてしまいました。

「自分の人生なんてどうなってもいい」

とやけになっていたのです。

ある日、そんな彼のところに幼い頃の家政婦さんが訪ねて来ました。

亡くなる直前のお母さんの言葉を伝えに来たのです。

「私は間もなく死にます。あの子は母親を失うのです。

幼い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるから。

憎らしい母なら、死んでも悲しまないでしょう。

あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、死んだ母親なんか憎ませておいた方がいいのです。その方があの子は幸せになるのです」

話を聞いて呆然とした彼は、

「自分はこんなにも愛されていたのか」

と号泣します。

その後、彼は立ち直って作家への人生を歩み始めました。

## コメント

お母さんの強すぎる愛情が彼を苦しめる結果になりましたが、真実を知った後は大きな力になりました。

子供は親を選んで生まれて来ることはできません。

「こんな親のところに生れなければ」と思う人もいないのでしょうか？

しかし、多くの親は子どもを愛してくれたはずで。

この世に生んでくれたことだけでも感謝してみてもいいかがですか？

「自分を生んでくれた母親や育ててくれた父親のためにも生きる」

と思えたら、きっと人生の目的が変わるはずです。